

## シャルコーの臨床講義とその文化的影響について —アンドレ・ド・ロルド『サルペトリエール病院の講義』を中心に—

外国語学部 真野 倫 平

### はじめに シャルコーのパラドクス

ジャン＝マルタン・シャルコーは19世紀後半のフランスにおける知的巨人である。彼はその業績によって、医学的領域にとどまらない広範な文化的影響を及ぼした。われわれは以前の論文において、シャルコーの臨床講義がグラン＝ギニョル劇に与えた影響を指摘した<sup>1</sup>。本論においてはその主題をさらに追究し、シャルコーの業績が与えた文化的影響について、近年のいくつかの研究を参照しながら幅広く検討を試みる。並行して、サルペトリエール病院の臨床講義を舞台にしたグラン＝ギニョル劇である、アンドレ・ド・ロルド『サルペトリエール病院の講義』について、シャルコーとの関係に注意しながら分析を試みる。

シャルコーは内科医兼病理解剖学者として、そして神経学者として、早くからヨーロッパ的な名声を築いた。彼は晩年にヒステリー研究に取り組み、サルペトリエール病院で催眠療法を用いた臨床講義を行ったが、この講義は圧倒的な人気を誇り、医学関係者のみならず文化人も大勢講義につめかけた。ウィーンからは若きフロイトが留学して講義を聴講し、そこで得た着想をもとに帰国後に試行錯誤を重ねて精神分析を誕生させることになる。しかし、やがてサルペトリエール学派とナンシー学派とのあいだに催眠をめぐる論争が起ると、シャルコーの講義は疑惑の目を向けられるようになり、その後シャルコーが急死するとその名声は急速に失墜した。

生前から多大な称賛と悪評に囲まれていただけに、彼の業績を客観的に評価することは容易ではない。アンリ・エレンベルガーは力動精神医学の歴史である『無意識の発見』（1970）において、メスマルからシャルコー、さらにフロイトへ受け継がれる知の伝播を明らかにした。シャルコーの業績については、第一の内科医兼病理解剖学者としての功績、第二の神経病学における功績は異論の余地はないが、「それにひきかえシャルコーの“第三番目の仕事”ともいうべきヒステリー、催眠術研究の客観的

1 真野倫平「文学と医学の接点 グラン＝ギニョル劇とシャルコー」、『南山大学ヨーロッパ研究センター報』第17号、2011年3月。同「グラン＝ギニョル劇と精神医学」、『日本フランス語フランス文学会中部支部研究報告集』第35号、2011年11月。

評価はきわめて難しい<sup>2)</sup>と述べている。シャルコーはそのヒステリー研究において、無意識の発見の一手手前まで行きながら、神経学的な観点から器質的要因にこだわるあまり、心理的解釈に踏み込むことができなかった。それに対してフロイトは、心理的要因に目を向けることで、性的抑圧や無意識的欲望を発見し、後の精神分析への道を切り拓いた。巨大な名声とその急速な失墜。明察と不可解な盲目。シャルコーには常にこのようなパラドクスが付きまとう。

江口重幸は、シャルコーの業績とその現代的意義を論じた『シャルコー 力動精神医学と神経病学の歴史を遡る』(2007)において、その生涯におけるいくつもの「パラドクス」を指摘する。

シャルコーの足跡はパラドクスにみちている。彼は実証主義、科学主義、反教権主義の旗を掲げながら、感覚の転移を含むネオ・メスメリズムや心霊研究を蘇生させている。大ヒステリー＝大催眠理論は、「カタレプシー状態」の神経＝筋組織を中心とした「人間機械」を分離することによって、その対極に位置する、簡単な刺激で外界の影響を取り込み、可塑的な「自我」を再構成する「夢中遊行状態」の「心的装置」を際立たせ、それを独立して取り出すことに道を開いている<sup>3)</sup>。

シャルコーは19世紀の科学と啓蒙の申し子として、反教権主義的な実証主義者として君臨した。しかし他方でその臨床講義は、メスメリズムや心霊主義といったオカルト現象と紙一重のいかがわしさをはらんでいた。江口は、シャルコーの科学的観察者としての視覚的性格が、かえって無意識という不可視の領域の開拓を妨げたのではないかと推測する。「解剖学＝臨床医学的に、あるいは電気＝生理学的に、あくまで「視覚的人間（見る人）」の明晰さをもって人間の身体をとらえようとしたシャルコーのアプローチは、逆に、人間の身体が多様性とその向こう側の「不可視」の領域を際立たせてしまった<sup>4)</sup>。それに対してフロイトは、無意識の声に耳を傾けることで後の精神分析への道を切り拓いた。

ミシェル・フーコーは『性の歴史Ⅰ 知への意志』(1976)において、19世紀の科学には性に関する認知の拒絶が付きものであったと指摘する。それは完全な拒絶というよりはむしろ、人々が性の周辺に作り上げた「真実を生産する巨大な装置」の一部

2 アンリ・エレンベルガー『無意識の発見 力動精神医学発達史』(上・下) 木村敏・中井久夫監訳、弘文堂、1980年、上巻112頁。

3 江口重幸『シャルコー 力動精神医学と神経病学の歴史を遡る』勉誠出版、2007年、94頁。

4 同、95頁。

とでも言うべきものである。シャルコーのサルペトリエール病院の臨床講義もその一例であった。

シャルコのサルペトリエール精神病院が、ここではよい例となるだろう。それは独特の検査、訊問、実験を伴う巨大な観察機関であったが、同時にそれは、煽動の仕掛けの総体でもあって […]。ところで、まさにこのような言説ならびに真理への絶えざる煽動というものを背景にして、認知拒否の固有のメカニズムが働き始めるのである。たとえばシャルコが、余りにも露骨に「あれ」が問題になりだすや、公開臨床の診察を中止する時のあの仕草である<sup>5</sup>。

ここにも明察と盲目のパラドクスが存在する。シャルコーは、古来より子宮病と見なされていたヒステリーに神経学的解釈を行い、臨床講義でもしばしば男性ヒステリーの症例を取り上げた。こうして彼は長年女性病とされていたヒステリーを「中性化」したのである。このような神経学的解釈はヒステリー研究に新たな見地を開いたが、他方で、フロイトが証言するように、性的な要因を看過することにつながった。それに対してフロイトは、ヒステリーの要因として性的抑圧を想定することで、ヒステリーの心理的解釈の可能性を開いた。

また、シャルコーの臨床講義はヒステリーに対する社会的な関心を刺激し、ヒステリーを題材とした文学作品や芸術作品を大量に生み出すにいたった。しかし、シャルコーが神経学的解釈によりヒステリーを中性化したにもかかわらず、芸術的想像力の中では女性病としてヒステリーのイメージが広く流通することになった。これもシャルコー理論の受容にまつわるもう一つのパラドクスである。

以上のように、シャルコーの功績にはさまざまなパラドクスが付きまとう。本論では、近年のシャルコー研究のいくつかを取り上げて、これらのパラドクスを読み解くことを試みる。まず、ゴーシェとスウェインの研究を取り上げて近年におけるシャルコー研究の現状を一瞥したうえで、シャルコーの芸術的・文化的影響の問題に焦点を当て、ジョルジュ・ディディ＝ユベルマン、ベルトラン・マルケル、ジャクリヌ・カロワの三人の研究を取り上げる。三人ともアンドレ・ド・ロルド『サルペトリエール病院の講義』に言及しているので、それについても並行して検討する。

---

5 ミシェル・フーコー『性の歴史Ⅰ 知への意志』渡辺守章訳、新潮社、1986年、73頁。

## 1 ゴーシェ&スウェイン『真実のシャルコー』

マルセル・ゴーシェとグラディス・スウェインは『真実のシャルコー』(1997)において、シャルコーについてこれまでに築かれたさまざまな神話を解体し、その業績の現代的意義を明らかにしようと試みる。この「真実のシャルコー」という書名自体が、取り払うべき「虚偽のシャルコー」すなわち神話的シャルコーの存在を前提とする。

真実のシャルコー、なぜならそこには断つべき呪縛、破壊すべき神話化の円環があるからだ。サルペトリエールの大家の肖像は、依然として無際限かつ曖昧な眩惑の対象である。その起源ははっきりしている。それはフロイトの発見においてヒステリー演劇の果たした役割に起因する。シャルコー、あるいは最初に無意識の発露を可視化した者。シャルコー、あるいは目の前にあるものを何も理解しなかった者。真実の大家と誤謬の見本。かぎりない名誉とかぎりない不名誉<sup>6</sup>。

まず、同書の前半において、スウェインが同時代の医学的状況の中にシャルコーを置き直し、彼に常に付きまとう二つの紋切型——フロイトを準備した「精神分析の先駆者」と無意識を発見しそこなった「ヒステリーの犠牲者」——を科学史的な観点から説明しようとする。スウェインは、このような両極端の評価が存在するのは、シャルコーがさまざまな点で「転換期」に位置しているからだと考える。

われわれの関心からすると、シャルコーは少なくとも四つの面において転換期の人物だった。すなわち、医学知、病院制度、ヒステリー概念、そして心理現象あるいは精神機能のモデルにおいて。

一、シャルコーは最後の偉大な解剖病理学者だったが、身体解剖を超えて、生理学的・生理病理学的分析の時代に身を置いていた。

二、サルペトリエール病院での30年のキャリアにおいて、シャルコーは古い施療院から近代病院への変貌に居合わせた——というよりもむしろ、その主要な推進者の一人だった。[…]

三、ヒステリーについては、シャルコーは「神経学的」ヒステリーの発明を介して、古来の女性ヒステリー——きわめて女性的な病気——から現代の心理的ヒ

---

6 Marcel Gauchet, Gladys Swain, *Le vrai Charcot. Les chemins imprévus de l'inconscient*, Calmann-Lévy, 1997, p. 7.

ステリー——一般化できるがゆえに脱女性化された——へと移行する変化の中心にいた。[…]

四、ヒステリーを超えて、シャルコーにおいて精神機能の新たなモデルが出現した。脳機能局在と失語症の研究のおかげで、一つの新たな「道具」が登場したが、それはもはや解剖学的なものではなく、フロイトが命名したように「心理的」なものだった<sup>7</sup>。

続いて、同書の後半部分で、ゴーシェが「移動するシャルコー」という表現を用いて、常に変貌を続けるシャルコー像を提案する。シャルコーは医学・精神医学・心理学などさまざまな領域の研究者と交流を持ち、たえず新たな領域に関心を抱いた。ゴーシェはとりわけ重要な三つの時点を指摘する。すなわち、第一に1878年の催眠の開始、第二に1885年の心的外傷の発見、第三に1890年の夢遊症への注目である。「この道筋は三つの重要な時期を含む。最初の二つは知られている。1878年の催眠の開始。1885年に心的外傷によって器質的症状の心理的決定の可能性を発見したこと。それに対して三つめはほとんど知られていない。1890年に『夢遊症』によって人格要因と人格解体现象を考察したこと。後で見るように、これは明るみに出す価値がある<sup>8</sup>」。とりわけ第三の時期においてシャルコーは、ジャネやビネといった新世代の心理学者とともに、新たな人格概念の構築に取り組んだ。以上のように、スウェインとゴーシェは、シャルコーの業績を医学制度の変遷や精神科学の発達の中に置き直すことで、そして他領域との関係性においてとらえることで、その現代的意義を立体的に浮かび上がらせようと試みる。

## 2 ディディ＝ユベルマン『ヒステリーの発明』

ジョルジュ・ディディ＝ユベルマン『ヒステリーの発明 シャルコーとサルペトリエール写真図像集』（1982）は、美術作品としての『サルペトリエール写真図像集』に注目することで、シャルコーの業績を美学的観点から分析した先駆的な研究である。この図像集は、サルペトリエール病院という密室的な空間の内部で、医師と患者がそれぞれの思惑のうちに共同で作りに上げた、科学とも芸術とも定義しがたい奇妙な作品である。「呪縛の相互作用が定着したのだ。すなわち、『ヒステリー』の映像を飽かず

7 *Ibid.*, p. 19–20.

8 *Ibid.*, p. 100.

求めつづける医師たち——従順に身体の演劇性を増幅していくヒステリー患者たち。こうしてヒステリーの臨床医学はスペクタクルになった。〈ヒステリーの発明〉だ。それは暗々裡に、芸術にも比すべきものに自らを同一化していった。演劇や、絵画とも紛うものに<sup>9</sup>】。

シャルコーのヒステリー研究は、何よりもまず症例の視覚的観察に基づいていた。ヒステリーは原因が特定されていない病気だったので、医師にできるのはせいぜい観察により病気を症例として指定し、それらを図表として分類することだけだったからである。シャルコーはヒステリー患者に対して催眠療法を行ったが、催眠は抵抗を排して対象を自由に観察するためのうってつけの手段だった。この『図像集』やポール・リシュールの制作した「完全かつ規則的な大ヒステリー発作」の一覧表は、シャルコーの学問的意図と芸術的資質の両方を満足させるものだった。

その際にシャルコーが利用したのが、発明されたばかりの写真技術だった。写真の特長は、あらゆる先入観を排して見たままを記録するという「記録の無媒介性<sup>10</sup>」にあった。この特性ゆえに写真は司法写真として採用され、権力の道具としての地位を獲得した。アルフォンス・ベルティヨンによる「人体測定」の発明に見られるように、まさにこの時代に「医学－警察の精妙な共犯関係<sup>11</sup>」が成立したのだ。

しかし実際には、写真には人為的な演出が欠かせなかった。ここに写真の「明証性のパラドクス<sup>12</sup>」が存在する。とりわけ長い露出時間を要した初期の写真技術は、周知な準備と忍耐強いポーズを必要とした。また、『図像集』の写真にはキャプションが付されているが、これらのテキストは個々の写真を一般的な概念に結びつけ、無言のうちに一つの解釈を強いる演出装置であった——「キャプション、読み取る義務、解釈、要するに自身の作劇法<sup>13</sup>」。結果として、作り出された写真集は、ヒステリー患者が性的魅力を漂わせつつさまざまな姿態を見せる、医学的資料とも芸術写真ともつかない奇妙なものになった。被写体を務めた患者オーギュスティーンは「ヒステリーの概念をまるごと体現する花形モデル<sup>14</sup>」であった。

そしてサルペトリエール病院における臨床講義は、医師が患者を利用して作り上げ

9 ジョルジュ・ディディ＝ユベルマン『ヒステリーの発明 シャルコーとサルペトリエール写真図像集』（上・下）谷川多佳子・和田ゆりえ訳、みすず書房、2014年、上巻8頁。

10 同、上巻53頁。

11 同、上巻86頁。

12 同、上巻91頁。

13 同、上巻94頁。

14 同、上巻183頁。

る芸術的な舞台装置であり、いわば医師と患者の共犯関係の上に成立するスペクタクルだった。問題は、医師と患者のあいだに支配と被支配をめぐる権力構造が存在したことである。医師は患者に対して支配力を行使し、患者は医師に気に入られるため魅力を行行使した。このような状況において、ヒステリーという病が常に「詐病への疑惑<sup>15</sup>」に付きまといわされていたのも当然である。

たしかに呪縛〔＝魅力〕である。サルペトリエールというこの地獄では、ヒステリー患者らはたえず医師たちに流し目を送っていた。これがこの種の法則とも言うべきもの、それもヒステリーの幻想の法則（虜にすることへの欲望）にとどまらず、精神病院そのものの機構全体の法則であった。いうなれば、それは恐喝の構造を有していたのだ。というのも、各ヒステリー患者は、不治の烙印を捺された純然たる「精神病者」たちの苛酷な「区域」に再配備されないために、己れの正統的な「ヒステリー性質」（色彩への愛着、「軽薄さ」、エロティックな恍惚等々）を顕示する、それも規則的に顕示する必要があったものと推測されるのである<sup>16</sup>。

とはいえ、このような緊張をはらんだ関係はいつかは破綻を迎える。オーギュスティーンはあるとき「演劇への憎悪」を舞台上で表現し、治療を拒絶した——「フィクションの決裂の瞬間<sup>17</sup>」である。その直前に彼女は、臨床講義の観客の中にかつて自分を強姦した男を見つけたと訴えていた。これと酷似した場面が、アンドレ・ド・ロルド『サルペトリエール病院の講義』（1908）の結末付近に存在する。同作では、サルペトリエール病院の入院患者クレールが、ある研修医に催眠で眠らされ、人体実験まがいの手術を受ける。彼女は臨床講義の際にマルボワ医師——シャルコーの分身——に被害を訴えるが、マルボワはそれをヒステリー患者特有の虚言と決めつける。マルボワが催眠で彼女を眠らせようとする、彼女は必死に抵抗する。そのとき彼女は人混みの中に問題の研修医を見つけ、復讐のために彼の顔に硫酸を投げかける。

アンドレ・ロルドの「恐怖劇」の一作品が、偉大な心理学者アルフレッド・ビネに献じられ、パリのグラン・ギニョール座で上演されたが、この劇は、非類似性

---

15 同、上巻155頁。

16 同、上巻257頁。

17 同、下巻133頁。

を医師へとさし戻すという、ヒステリー患者の復讐で幕を閉じている。「クレール」という名のヒステリー患者は、彼女の実験者の顔に硫酸を投げつけ、醜く変形させたのであった……<sup>18</sup>。

こうして、臨床講義の教室は血の惨劇の舞台へと変貌し、医師の患者に対する横暴と催眠という手段の暴力性が白日の下にさらされる。これが、自分たちを被験者として利用した医師たちに対する、ヒステリー患者の復讐であった。この戯曲は表向きはロルドの単独作となっているが、シャルコー時代のサルペトリエール病院に勤務し、ロルドの共作者でもあったビネが、その制作に深くかかわっていたことは疑いない。すでにシャルコーの死から15年が経過していることもあり、同作では臨床講義の演劇性がかなり批判的なかたちで示されている。

### 3 マルケル『サルペトリエール小説群』

ベルトラン・マルケルは『サルペトリエール小説群』（2008）において、シャルコーが19世紀末の文学作品に与えた影響を検証する。マルケルによれば、19世紀末にはシャルコーを思わせる人物が登場する小説が数多く制作された。これらの「サルペトリエール小説群」においては、医師が科学の万能の体現者として社会を啓蒙する役割を果たす。

シャルコーの文学的重要性は、19世紀を通じて医師が獲得した強大な権威に基づいている。たとえば1838年の精神医療法は、医師が社会の治安のために果たすべき役割を明記することで、その権威を強化するものだった。医師はやがて科学と啓蒙の体現者、共和主義の守護者として、社会を改革するメシア的な役割を負わされるにいたった。シャルコーはしばしばナポレオンに例えられたが、それは彼が19世紀の医学の全能を体現していたからである。「シャルコーは一人の医師を超えて、勝ち誇る医学のアレゴリーになった。ナポレオンが政治で、ユゴーが文学でそうなったように<sup>19</sup>」。

シャルコーのこの権力をより詳細に検証しよう。まず、政治的次元において、シャルコーは19世紀の共和主義的な価値観を体現していた。たとえば悪魔憑きをヒステ

---

18 同、下巻167頁。

19 Bertrand Marquer, *Les Romans de la Salpêtrière. Réception d'une scénographie clinique: Jean-Martin Charcot dans l'imaginaire fin-de-siècle*, DROZ, 2008, p. 19.



リーとして解釈し、過去の魔女裁判の誤りを正すことは、共和国の世俗主義と反教権主義に与することを意味した。また、彼のヒステリー研究は、特定の階級や集団に対する政治的保護や管理の強化を提案するものであった。「第一に分析、治療、すなわち管理すべき存在は、女性、労働階級、社会の周辺にいる者たちである<sup>20</sup>」。

また、文学的次元においては、シャルコーの家は一種の「社交界のサロン」として大きな影響力を持っていた。この時代、文学的素養は医学の分野でも重要視されており、とりわけ精神医学においては、病気の兆候を読み取る美学的感性やそれを記述する文体の力が求められた。「芸術的気質に訴えるのは、すでに狂気の医療化の際に精神科医たちが用いたやりかたである。処方の正当性は何よりもまず、医師が自らの洞察力を証明できるかどうかにかかっていたからだ<sup>21</sup>」。それゆえシャルコーの芸術的資質は、彼の医師としての評価を高める一因となった。

とはいえ、文学作品においては科学的正確さより美学的効果が優先されるため、シャルコーの学説はさまざまな変更を被ることになる。そこでは医師の英雄的な役割がいやがうえにも強調され、病気の社会に対する脅威も大幅に誇張された。その結果、ヒステリーは依然として呪われた致命的な病として描かれることになる。

シャルコーがヒステリー患者の無実を晴らし、反教権主義的闘争の面で患者を「回収する」という配慮を掲げたにもかかわらず、ヒステリーの悲劇を小説に移し替えると、たいていは憐憫の力よりも恐怖の力に訴えることになる。物語の中心にある〈宿命〉の形象である、この小説中のシャルコーは、病理学の法則を宣言し、それによって「症例」が示す衛生学的あるいは反教権的教訓を読者に理解させるばかりで、償いや治療といった解決策は提示しないのである<sup>22</sup>。

サルペトリエール学派の学説は、ヒステリーを神経学的に解釈することで、それに付きまとう宗教的・文化的・性的な汚れを洗い流して無害化するはずのものであった。にもかかわらず、芸術的想像力の中ではヒステリーは依然として女性的な病と見なされた。したがって、これらの小説群におけるシャルコーの女性に対する役割は両義的である。彼は女性を解放するフェミニズムの使徒であると同時に、女性の監視者や管理者でもあるのだ。

---

20 *Ibid.*, p. 80.

21 *Ibid.*, p. 89.

22 *Ibid.*, p. 157.

サルペトリエール小説群において、シャルコーは、心理学と生理学を調和させられるフェミニズムの指導者として登場する。あるいは登場しなくても、小説の反教権的言説をかたちづくる憑依の解釈の唱道者となる。そのほかに、彼は女性に行使すべき管理を体現しており、生理学に基づく衛生によって、健全な社会に必要な両性間のヒエラルキーと分業を打ち立てる。医師は女性患者に同情するが、それでもヒステリー患者を危険な伝染源として描くことをやめはしない。ヒステリーは、現代性という病因と神秘的幻影の邪悪な効果にさらされた社会にとっても、またヒステリーの光景を直視することで女性の魔力にさらされ続ける医師にとっても、同様に危険な存在である<sup>23</sup>。

サルペトリエール小説群でしばしば扱われたのが、催眠の主題、とりわけ催眠を利用した犯罪という主題である。催眠で患者を自由に操るシャルコーの姿は、医学技術への驚嘆を誘うと同時に、それが悪用された場合への不安をかき立てた。実際19世紀末には、1888年のシャンビージュ事件、1890年のグッフェ事件、1893年のジル・ドラ・トゥレット事件など、催眠を用いたとされる犯罪事件が各地で起こり、社会的な関心を集めた<sup>24</sup>。グッフェ事件の犯人であるガブリエル・ボンパールの裁判は、サルペトリエール学派とナンシー学派の論争の舞台となり、シャルコー理論が失墜する契機になった。

アンドレ・ド・ロルド『サルペトリエール病院の講義』においても、研修医が催眠を用いて入院患者クレールを眠らせ、人体実験まがいの手術を行う。この戯曲にはまた、医師に気に入られるためにヒステリー発作を巧みに演じてみせる、シュザンヌという入院患者が登場する。マルケルはこの作品を次のように分析する。

アンドレ・ド・ロルドの偽名で発表された戯曲において、アルフレッド・ビネはヒステリーの詐病と催眠術師の支配力の問題を対比させ、嘘つきのパラドクスを演劇特有の力に変えようとする。最初の場面は、シュザンヌという登場人物を介して、医師がたえずさらされる誘惑を示している。彼女は「小ヒステリーの傑作」であり、この手の策略に慣れたベルナル医師に向かい、静脈瘤があると言っ

23 *Ibid.*, p. 231.

24 これらの事件については前掲の真野倫平「文学と医学の接点 グラン＝ギニョル劇とシャルコー」を参照。

て自分の脚を見せようとする。[…]

たとえ『この小娘は仮病の名人』であるとしても、その主要な危険は、二面性を病気の特徴とすることで、医師が患者に対して持ちうる実際の支配力を忘れさせる点にある。無邪気なヒステリー患者のクレールは、身を守るすべもなく、ある研修医の疑わしい実験を受ける。ベルナル医師の説得にもかかわらず、彼女はその研修医を告発しても無駄だと判断する<sup>25</sup>。

ここでは、医師の側からの治療の強制と、患者の側からの詐病の働きかけという、医師と患者のあいだのひそかな闘争の存在が示される。マルボワは一方ではシュザンヌの巧みな演技に欺かれ、他方ではクレールの真摯な訴えを虚言としてはねつける。彼はヒステリーの専門家を自任しながら、目の前の患者の虚偽と真実を見きわめることができない。その意味でここには、ビネがかつての師シャルコーに投げかけた一種の批判を読み取ることができる。「ビネはこうして、レオン・ドーデーが1894年に表明したのと同じ観点を取り、大家が、自ら科学的有効性を与えた現象を見損なう姿を描き出す<sup>26</sup>」。

#### 4 カロワ『催眠、暗示、心理学』『二重人格と多重人格』

ジャクリーヌ・カロワは『催眠、暗示、心理学』（1991）において、19世紀末における心理学の誕生を、メスメリズムや心霊主義といった民衆文化の伝統に関連づける。「磁気術と催眠は、実験と社会性のモードに基づく、無意識の文化であった。実際、眠りを引き起こすという事実と、これらの事実に関する理論は、この世紀全体を貫く根底的な運動によって引き起こされ、運ばれ、伝えられたのである。ヒステリーの歴史と同様、磁気術と催眠の歴史は文化史によって継承され解明されることを要求している<sup>27</sup>」。こうしてカロワは、大衆文化に属する磁気術や心霊主義<sup>28</sup>と、科学として公

25 Bertrand Marquer, *op. cit.*, p. 225. マルケルはビネをこの戯曲の実質的な作者と見なしている。また、正確には、劇中で脚を見せようとするのはシュザンヌとは別の女性患者である。

26 *Ibid.*, p. 226.

27 Jacqueline Carroy, *Hypnose, suggestion et psychologie. Invention de sujets*, PUF, 1991, p. 35.

28 心理学の誕生のうでで心霊主義は磁気術とともに大きな役割を演じたが、従来の研究では心霊主義の役割が磁気術に比べて軽視される傾向があった。カロワは、その原因の一つは心霊主義の女性的性格にあると推測する。「心霊主義は実際、より女性的で、よりフェミニストであった。というのも、それによって被験者たちは、宗教と死者礼拝の守護者という伝統的役割を、

認された医学や心理学を、文化現象という共通の枠組みでとらえようとする。

シャルコーは、サルペトリエール病院という小世界において、あらゆる方面に影響力を持つ絶対君主としてふるまっていた。「シャルコーは古典的な医学の大教授として、権威の絶頂で肩書に囲まれ、過剰な顧客主義の中で働いていた。大学病院の支配者として、選抜試験や就職を管理し支配していた<sup>29</sup>」。しかし、シャルコーの独自性は決してその強烈なカリスマ性だけにあるのではない。カロワが強調するのは、19世紀に流行した磁気術の公開診療とシャルコーの臨床講義のあいだの、スペクタクル的空間としての同質性である。

彼の教授としての特異性はどこにあったのか。彼は歩くのが好きではなかった。そこで患者を実験台として大講義に来させることを思いついた。それはさまざまな協会が催す診察や、職業的磁気術師の見世物に相当するものだった。[…] 授業は大講義のように、そして教授が——ときに患者の症状を模倣しながら——そこに参加しようとしないう演劇のように進行した。シャルコーは、この世紀に磁気術の講義や講演を行ったあの無数の「教授」の権威ある同僚のようだった。彼らと同様に、夢遊病者を講義し説明するだけでなく、それらを自らの理論の科学性の資料あるいは生きた証拠として示したのだ。

観客は大ヒステリーや大催眠の支持者や信者の集まりとなった。新しい科学の信条はときに、古い磁気術のそれと同じくらい奇抜で異様だった<sup>30</sup>。

カロワは心理学の誕生を文化的現象として扱うために、研究書と文学テキストの境界を越えて、陳述のモードそのものを考察する必要があると主張する。「しかし、科学とフィクションが似たようなテーマを持つと示すだけで満足してはならない。心理学のテキストを小説のように読み、陳述の内容だけでなく陳述のモードをも検討しなくてはならない<sup>31</sup>」。そしてその後刊行した『二重人格と多重人格』(1993)において、今度は科学の側でなく文学の側から心理学の誕生を検証しようとする。「決まりごとやきれいごとにとらわれた聖人伝の物語が言うのとは反対に、心理学は、哲学や文学

---

形を変えて取り戻すことができたからである。同時に、それによって自分たちのトランス状態を男性術師の専横から解放できたからである。霊たちはしばしばフェミニストな発言をしたのだ……」(Ibid., p. 21)。

29 Ibid., p. 58.

30 Ibid., p. 59-60.

31 Ibid., p. 22.

と完全に切り離された科学として創始されたわけではない。それは文学と科学のあいだ、科学とフィクションのあいだの雑種の領域に根を下ろした<sup>32</sup>】。

カロワは同書でシャルコーの弟子の心理学者アルフレッド・ビネを取り上げる。ビネは心理学者の仕事のかたわら、演劇に関心を抱き、劇作家に関する心理学論文を著した。さらに、心理学者として調査を行ったアンドレ・ド・ロルドと意気投合し、共同で劇作をするにいたった。「今度は心理学者が自分の立場を離れ、一時自分の被験者であった者の協力者になってしまった<sup>33</sup>」。ビネはシャルコーと同様に、学者と芸術家の二面性を有していた。また、後で見るように、シャルコーの臨床講義とビネの心理学実験には類似した演劇的性格が認められる。

カロワは、『サルペトリエール病院の講義』において、人体実験の犠牲となった患者クレールがマルボワに被害を訴える場面に注目する。自分の診断に絶対的自信を持つマルボワは、相手の真摯な訴えに耳を貸そうともしない。カロワは、この場面と『火曜講義』に記録されたシャルコーの実際の講義の様子を比較検討したうえでこう述べる。

この対話は、『火曜講義』で一ページにわたって読めるものを演劇化したものである。ババンスキの採録は、現代の読者にはしばしば不快な印象を与える。たとえば、実際、シャルコーは一般に、質問する相手——患者であろうとなかろうと——の目の前で、彼らのことを三人称で話した。まるで彼らが、聞くことも理解することもできない、単なる受動的な症状の媒体、講義の題材にすぎないというように<sup>34</sup>。

したがって、マルボワの傲慢はシャルコーの傲慢にほかならない。カロワは、訴えを虚言と決めつけられて憤るクレールの台詞の中に、ビネのかつての師シャルコーに対する遅ればせの批判を読み取る。「ところで、科学者を離れて劇作家の衣装をまとうとき、ビネは『新しい偶像』のキュレルと同様、ためらうことなく、ある種の心理学的質問を激しく批判し、学者に対して被験者を擁護した。『サルペトリエール病院の講義』ではキュレルよりも先に進んだ<sup>35</sup>」。実際、ビネはこの戯曲の初演の2年後の1910年に発表した論文で、1887年のある逸話を回顧しつつ、シャルコーに対して同

32 Jacqueline Carroy, *Les personnalités doubles et multiples. Entre science et fiction*, PUF, 1993, p. vii.

33 *Ibid.*, p. 171.

34 *Ibid.*, p. 180.

35 *Ibid.*, p. 179.

様の批判を行っている。またカロワは、ビネの戯曲の中に、彼の心理学者としての医師一般に対するライヴァル意識も読み取る。「すべてのケースで、被験者が正当に抗議する相手、あるいは被験者が騙す相手は、心理学者ではなく、ほとんど常に医師である<sup>36</sup>」。

さらにカロワは、ビネが（自分の娘たちを含む）子供たちを対象に行った心理学実験に着目する。この実験は演劇的な性質を持っており、質問にはある種のシナリオが用いられた。興味深いことに、そこではグラン＝ギニョル劇のように、死や監獄といった不吉な主題がしばしば取り上げられた。「ビネとシモンの名を有名にした知能検査は、青少年にいくつかのシナリオを提示するが、それらはビネとロルドの死と恐怖の演劇に見合うものであった。子供は三枚の黒い芝居がかった版画を描写しなければならない。それらは『レクチュール・プール・トゥス』から切り取られたもので、貧困、逃亡、寒さ、老い、監獄、死を表していた<sup>37</sup>」。ビネはこうした恐ろしいイメージを子供に突きつけ、身体的な反応を引き出そうとした。まさにサルペトリエール病院の臨床講義において、シャルコーが催眠を用いて患者のヒステリー発作を誘発したように。「被験者を物語に出てくる子供の一時的な小型版にすることで、ビネは軽い催眠状態か最少の痙攣的恐怖の状態——それなしではよい被験者になれない、あるいはまったく被験者になれない——を再現しようとした、と推測することもできる<sup>38</sup>」。

ビネはさらに、物語が被験者に最大限の効果を与えるよう、自ら俳優のように演技を行った。この点もまた、彼の心理実験に演劇的な性格を付与するものであり、シャルコーが臨床講義において演出家としてふるまったことを思わせる。「ビネはこれらの例で、被験者をずっと手元に置いていることを利用して、マルグリット〔長女マドレーヌの仮名〕の生来のものとされる観念形成において、瞬間的な生体切開を実践する。この日常的で小規模の心理的生体解剖は、よりうまく欺くために「自信をもって」語る俳優の演技によって、そして（あるいは）不意打ちで驚かせることによって、達成される<sup>39</sup>」。

こうして、シャルコーとオーギュスティーン、マルボワとクレール、ビネとマルグリットのあいだに、ある相似的な関係が成立する。それは医師と患者、あるいは心理学者と被験者のあいだの、支配と反抗をめぐる闘争的な関係である。このように考えると、サルペトリエール病院でシャルコーのもとで勤務したビネが、心理学者として

36 *Ibid.*, p. 182.

37 *Ibid.*, p. 184.

38 *Ibid.*, p. 187.

39 *Ibid.*, p. 188.

演劇に強い関心を抱き、さらに自ら劇作に手を染めたことは決して偶然ではない。

ビネが生涯の終わりに背負い込んだ演劇のキャリアは、単なる逸話であるどころか、おそらくはアリストテレスの言う悲劇のように、彼が実験者として、そして父親としての情念のカタルシスを行うことを可能にした。さらに、グラン＝ギニョル劇のドラマツルギーは、心理的生体解剖を可能にする——知られざるがゆえにより有効な——ある種の力を大胆に開示する<sup>40</sup>。

### おわりに

近年において、シャルコーの臨床講義は単に医学的な側面からだけでなく、広義の文化的現象としてさまざまな角度から考察の対象になっている。本論においてわれわれは、幾人かの研究者の分析を参照しつつ、その文化的影響の広がりを検証した。その過程で、シャルコーの臨床講義、ビネの心理学実験、そしてグラン＝ギニョル劇のあいだに、ある種の共通の演劇的構造を見出すにいたった。ここでは、科学者が真実の探究の名において被験者の身体を操り、苦痛と官能の入り混じったスペクタクルを展開するのだ。その根底には、性的欲望と権力意志が結びついた、ある共通の知の枠組みが存在する。その枠組みについてさらに追究することが、われわれの今後の課題になるだろう。

ところで、ビネがシャルコーの患者に対する専横的な態度を批判しながら、自身の心理実験では被験者に対して同様の態度を取ったということ、これもまた一つのパラドクスではないだろうか。ビネのかつての師シャルコーに対する批判、この「父殺し」の主題についても、また機会を改めて論じることにはしたい。

### 付記

本論文は2018年度南山大学パツへ研究奨励金I-A-2の助成による研究成果の一部である。

---

40 *Ibid.*, p. 191.